

アラビア半島の生い立ち

小村幸二郎

謎の先カンブリア時代

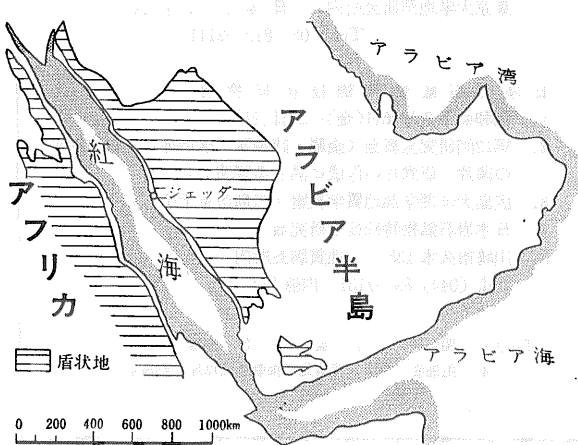
アラビア半島の歴史にジャーヒリア（無明時代）があったと同じように この荒涼たる大地を形造る地質の歴史にも 古いそして神秘的なベールにおおわれて まだ私たちにその全貌を現わさない時代があった。地球の誕生以来およそ44.5億年にわたる先カンブリア時代（始生代および原生代）。それは人類の誕生を招く地球の夜明けであり 波乱に満ちあふれた 將に地質的ジャーヒリアである。この途方もなく長い歳月の流れの中で起こった数々のできごとは 現存する大陸の多くの骨格を形成する要因となっているにもかかわらず カンブリア紀から現世に至るおよそ5.2億年の歴史をつづったできごとと比べれば その多くが未解決のナゾとして残されている。とくに 長い間にわたって科学者の立入ることをゆるさなかつたきびしい自然条件が支配するサウジアラビアでは その大部分が解明されていない。しかし 驚威的發展を遂げつつある近代科学のメスは 近い将来 必ず この秘められた事件の数々を 一つまた一つ 切開き そして事実の確認とそれを基礎とした巧みな推理の展開とによって みごとに解決するだろう。

サウジアラビアで一番古い岩石は 始生代の後期から原生代にわたって形成されたと推定される いわゆる先カンブリア時代の堆積岩類・火成岩類・変成岩類で これらは アカバ湾の北東方からサウジアラビアとイエメンとの国境付近までほぼ梯形に露出する他 アラビア

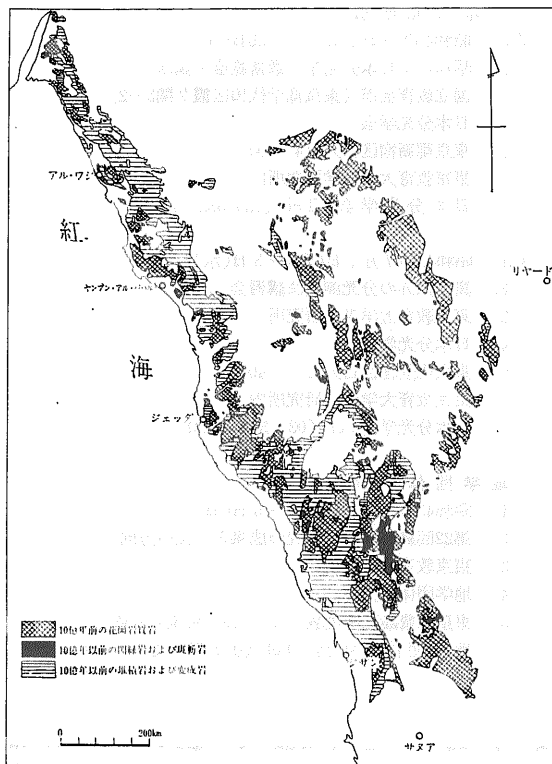
半島の南端部付近に地塁状に露出して アラビアーヌビア楯状地の一角を形成している(第21図)。サウジアラビアにおけるその分布は国土面積のおよそ27%を占める。

アラビア半島の骨格となっているこの楯状地では 現在知られている限りでは 最古の岩石とされている片麻岩を礫として含む Hali 結晶片岩類の原岩の堆積以後 Baish 緑色岩の堆積まで 泥質岩や砂岩を主とし 石灰岩やドロマイトをはさむ地層が堆積した。これらは現在アラビア半島の西縁部にほぼ沿って 北西—南東方向に分布している。これらの堆積過程においては海底火山活動が活発に行なわれて安山岩熔岩・玄武岩熔岩・同質碎屑岩類が噴出堆積し 一部では緑色岩や角斑岩の活動が行なわれた。枕状熔岩・泥質岩・礫岩等を主として原岩とする Baish 緑色岩の堆積時期には この楯状地でもっとも古い深成岩である閃緑岩や斑岩が侵入した。これらは Lith 複合岩と呼ばれている。

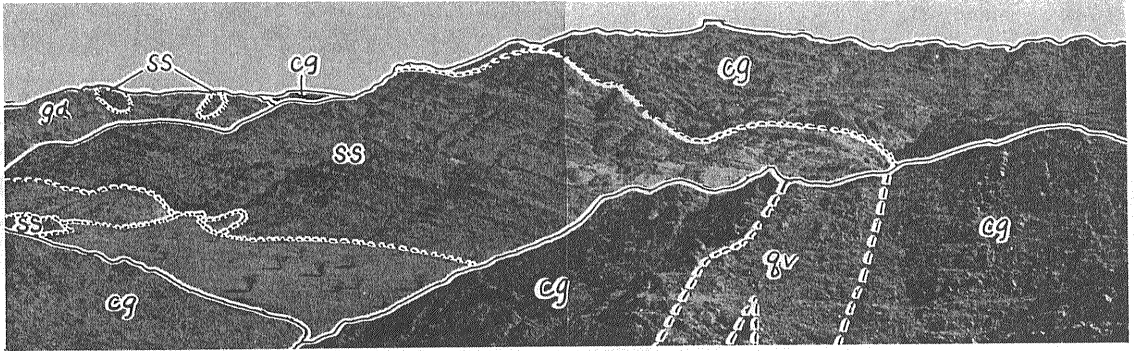
Lith 複合岩の活動がこの楯状地においてその後大規模



第 21 図 アラビア半島の楯状地



第 22 図 先カンブリア系下部の分布



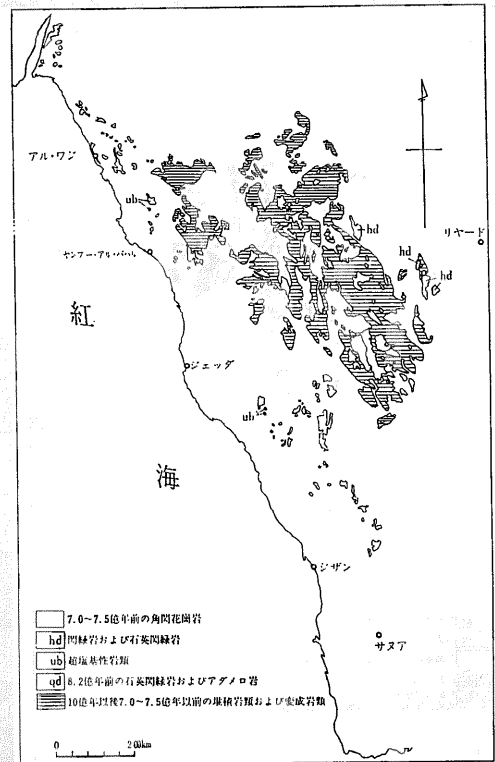
第24図 Wadi Tufaya で発見された先カンブリア系の不整合 cg: 礫岩 ss: 砂岩 gd: 花崗閃緑岩 qv: 含金石英脈

に起こった火成活動の前ぶれであったかのように その直後にまず閃緑岩および斑岩が進入し そしておよそ10億年前に 構造運動に関連して 花崗岩が大規模に進入し この楕状地のおおまかな形ができたようである(第22図)。 もしこの楕状地を構成する先カンブリア時代の岩層を便宜上 上・中・下部に区別するとすれば 一応 この花崗岩までの堆積岩類が下部として取り扱われるだろう。 この花崗岩の進入以後7.0~7.5億年の絶対年代を示す花崗岩の進入まで 2~2.5億年にわたる期間の堆積岩類と火成岩類とが中部に相当する。 この間には まず8.2億年前に 黒雲母に富む石英閃緑岩やアダメロ岩が進入し その後安山岩や同質碎屑岩類・礫岩・砂岩・石灰岩等(Halaban層)が堆積した。 Halaban層の堆積時には閃緑岩や石英閃緑岩が進入したが これらの火成活動はアラブ連合内にも起こっている。 これらの火成岩類の活動にやや遅れて 局部的に ズン橄欖岩・輝岩・異剝岩等が進入したが これらの多くはその後 蛇紋岩に変成されている。

その後 漣痕をもつ粘板岩および砂岩を主とする Hibishi層や粘板岩・珪岩等を 主とする Murdama層・Hadiyah層が堆積し 7.0-7.5億年前に 灰色またはピンク色の角閃花崗岩が進入して 中部が構成された(第23図)。 この花崗岩の進入後の堆積岩類および火成岩類が一応 上部に相当する。 この部分ではまず Farida大理石が堆積したが その後 6.7億年前までの間に この楕状地の少なくとも一部が陸化するという事件が発生した。 そのため 砂岩・粘板岩・礫岩からなる Fatima層が既存の岩層を不整合におおうことになった。 このような事実は Jeddah市民の憩の場として知られているオアシスがある Wadi Fatimaで確認されているが 第一次日本地質調査団が Al Wajhの北東方約50kmに位置する Wadi Tufaya付近で発見した不整合もこれに類するものかもしれない(第24図)。

Fatima層が堆積した後 Hijaz山脈や Asir山脈地域には流紋岩熔岩・同質凝灰岩および角礫凝灰岩を主とする地層が広く堆積し 6.7億年前には灰色の角閃花崗岩が 5.35億年前頃には花崗岩や閃長岩が進入して この楕状地を構成する先カンブリア時代の岩石の形成が完了した(第25図)。

Hali結晶片岩の原岩が堆積して以来およそ5.35億年の絶対年代を示す花崗岩および閃長岩の進入まで6億年以上におよぶ長期間に堆積した地層や進入岩類は 幾度となく 構造運動や変成作用をうけた。 したがってこれらは きわめて複雑な構造を呈しているが 変成



第24図 先カンブリア系中部の分布

度は低く 不変成の状態に残っている部分が少なくない。しかし これらの中には 化石は見出されていない。カンブリア紀以後の地層からは 保存のかなりよい化石が多く見出されているが 原生代末期の地層とカンブリア時代の地層とを比較した場合 化石の有無という点で なぜにこのような明瞭な差異があるのだろうか。先カンブリア紀の地層についての調査研究がカンブリア紀以後の地層についてのそれよりも はるかに遅れており 十分でないことは確かではあるが 両者間にみられるこのような差異は あながちこうした面での差異だけにとづくものではなからう。世界の楯状地を構成する先カンブリア紀層中には 各地で 藻類や海綿類・節足動物・腔腸動物などの化石が発見されており サウジアラビアの先カンブリア紀層中に化石が皆無であるとは考えられないかもしれない。しかしそれにしても生物が カンブリア紀に入って 急に 種類および量共に非常に多くなったということが容易に考えられるだろうか。

原生代の地層とカンブリア時代の地層との関係は サウジアラビアに限らず 世界各地において 例外なく不整合であり(第26図) 両者の間に堆積間隙があったことを明瞭に示しこそすれ 両者が完全に整合である事実をまったく示さない。このことは カンブリア紀層の

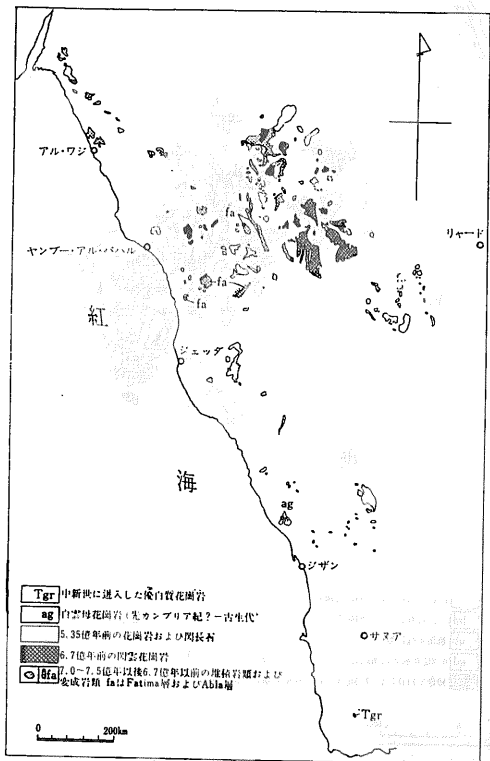
堆積以前に 先カンブリア紀層が激しく浸蝕削剝されたことを示す。このような事実と生物界の消長とを関係づけて想定すれば これまでに見出されている 先カンブリア紀層中の化石との中間型の化石がこの削剝された地層中に含まれていたのではなからうかという疑問点が生じる。Walcott が Liparian と呼んだこの幻の地層の正体 これも先カンブリア時代にまつわる事件とかかわりをもつ秘められたものの一つであろう。

メソポタミア地 向 斜

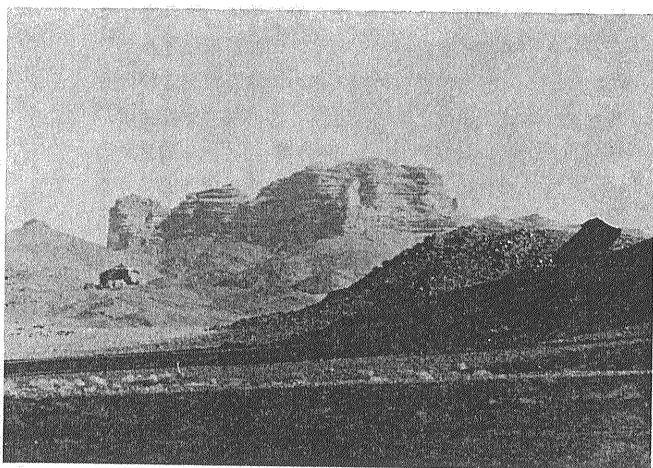
この楯状地は メソポタミアからアラビア湾の北岸沿いに 北西—南東方向にのびる地域を軸として 古生代のはじめから静かに沈降をはじめ その海底では 先カンブリア紀層を基盤として地層が堆積していった。これがいわゆるメソポタミア地向斜である。

この地向斜においては カンブリア紀以後 砂岩を主とし 一部に石膏層をはさむ地層が 相次いで 整然と堆積していった。その最下位にあたるカンブリア紀層は オレンジ色ないしピンク色を呈する含礫砂岩・砂岩によって特徴づけられており これと下位の先カンブリア紀層とは それぞれの構成岩類の岩質や構造などによって 明瞭に区別される。サウジアラビア北辺の軍事基地である Tabuk から Al Aqabah およびサウジアラビア北西部に通ずる道をたどると Siq 砂岩と呼ばれるカンブリア紀層が美しい風蝕地形を示し うるおいのないサウジアラビアにいることを忘れさせる(第27図)。

カンブリア紀以後のこの海は シルリア紀頃から次第に浅くなり 石炭紀には完全に陸化したが 二疊紀になると再び沈降して Tethis 海におおわれ その海底では再び地層が厚く堆積していった。この海域が陸化する前 デボン紀頃から石灰岩およびドロマイトの堆積が目立ち この傾向は二疊紀に入って顕著になる。



第25図 先カンブリア系上部と7.5億年以後の花崗岩の分布



第26図 先カンブリア紀層とカンブリア紀層との不整合(Tabuk と Hijaz 山脈との中間地域) 写真中央部の横縞をもつ小高い丘はカンブリア紀の Siq 砂岩層であざやかなオレンジ色を示す含礫砂岩層よりなり その下部の先カンブリア紀層を不整合におおう Siq 砂岩層の基底部分には 顕著ないわゆる基底礫岩層はみられない両岩層の構造の相異に注意

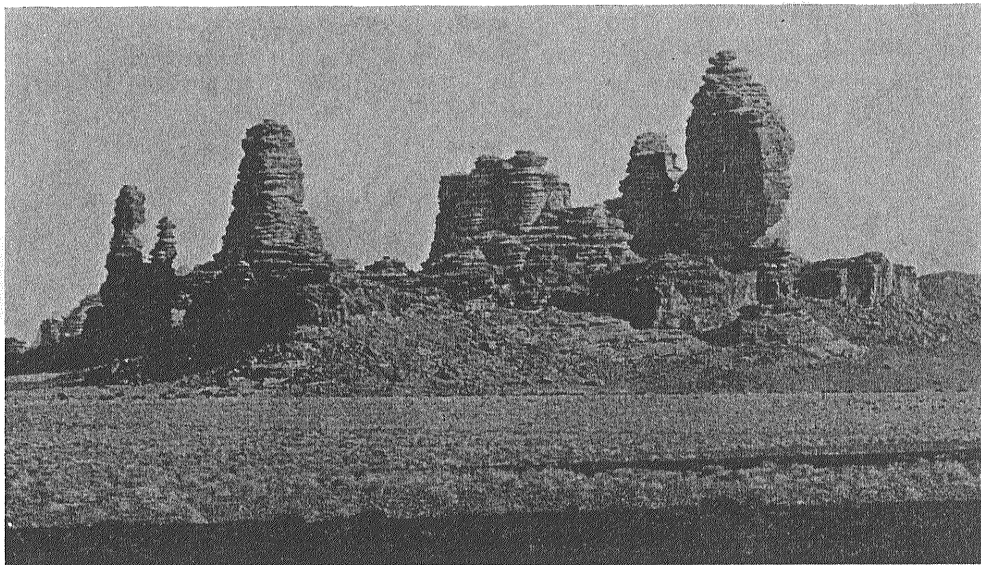
古生代を過ぎて中生代に入ると 砂岩を主とし 石灰岩や石膏をはさむ地層がまず堆積したが ジュラ紀後期になると泥岩や頁岩をはさむ石灰岩が非常に厚く堆積した。これらの石灰岩は その岩質上 Tuwaiq 山脈のような けわしい地形を造っていることが多い。このような厚い石灰岩の堆積は白亜紀に入っても引続いて行なわれたが バレーム期以後は頁岩および砂岩の堆積が卓越する。そして ハドラマウト山脈地域に分布する白亜紀層にデルタ堆積物や潟成ないし浅海性堆積物がみられるように 白亜紀に入って はじめて 地層の堆積の場の環境がかなりはっきりしてくる。カンブリア紀以後 石炭紀には陸化するという大きな事件があり ジュラ紀末頃には 火山活動によって惹起された深部断裂に基因して 造陸上昇が起こり 火山活動および造陸上昇は白亜紀へ続いた。

この当時には圧縮褶曲運動は行なわれず ジュラ紀末この変動の代償的役割として地塊断層運動が行なわれたらしい。ジュラ紀から引続いたこの変動によって 白亜紀初期には 北部紅海地域が上昇し 南部地域は沈降したが 中期になると 北部地域には海侵が始まり 南部地域には海退が始まった。そして 白亜紀を通じてアラビア半島南西部やエチオピア等のような 南部紅海地域では断層運動あるいは深在断層運動が時折起こり 遂には 白亜紀末から古第三紀にかけて 玄武岩の活動を誘発するに至った。これらの断裂に沿って行なわれたその後の運動は 第三紀末から第四紀にかけて 再び火山活動を招くことになる。

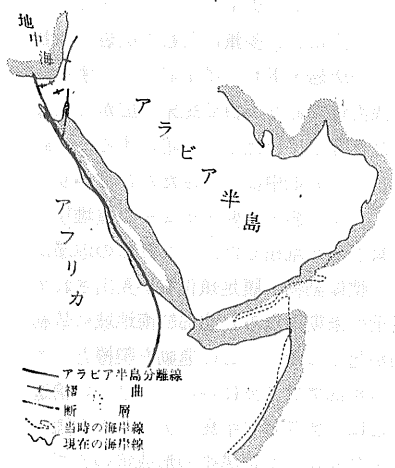
第三紀のはじめに当る晩新世の堆積物は石灰岩 ドロ

マイト質石灰岩・ドロマイト・チャート等を主とし マスカットの南東部では貨幣石を多量に含む石灰岩 石膏質頁岩・チョーク質泥灰岩・ドロマイト等を主とする。これらの堆積物は浅海性であり 白亜紀末に広がった陸地がこの時にもまだ存在していたことを暗示する。始新世に入ると Tethis (大地中海) がふたたび広がり 海成および海浜成のシルト岩・石膏・チョーク質堆積物・石灰岩・石灰質頁岩等が堆積した。これらの地層からは双子葉類植物・軟体動物・腹足類化石が見出されている。下部始新世の末期になると北部紅海地域に最初の重要な褶曲運動が起こった。この運動を契機として 東部地中海地域から東部アフリカにかけてはげしい構造運動が起こり ここに アラビア半島とアフリカ大陸の分離 スエズ湾およびヨルダン地溝帯の形成等のきざしをみるようになった。漸新世の頃 アラビア半島の大部分は陸化していたらしく この頃の堆積物は半島南端部付近に分布するにすぎない。堆積物の多くはチョーク質石灰岩・泥灰岩・ドロマイト質石灰岩・チョーク等である。この当時の陸化は始新世から継続した構造運動と密接に関係して行なわれ 漸新世末になると いよいよ紅海形成の基因となった構造線が形成され(第28図) 北部アラブ連合・シナイ半島・スエズ付近に玄武岩熔岩が噴出した。

中新世に入って Tethis 海はかなり浅くなり メソポタミア地向斜は 地向斜としての性質を失うことになった。海域では雑色頁岩・砂岩・石灰岩・ドロマイト・チョーク質石灰岩等が堆積し 一部では河成・湖成堆積層や蒸発残留岩等が堆積した。Jeddah の東方に位置する Wadi Fatima 地域で 先カンブリア紀層や花崗



第28図
カンブリア紀の
Siq 砂岩層にみら
れる風蝕地形
横縞は層理面に一
致する 第26図の
東方10km 付近



第28図
漸新世末の古地理と
主要構造線 (DA-
NIEL H. SWA-
RTZ DANIEL D.
ARDEN JR. によ
る)

岩類を不整合におおい 鯛状赤鉄鉱々床をはさむ Shu-maysi 層は中新世～鮮新世の堆積物であろうといわれている。下部中新世のブルジガリア(またはランギア)期は構造運動が非常に激しかった時期であり 漸新世末頃形成されたスエズの構造線は構造的に活性であったしブルジガリア期の終末近くになると 剪断力による断層がほぼ東西方向に形成されると共に アカバ湾から死海へのびる地溝を形成する断層等が形成された。そしてアラビア半島は 総体的な北方および北東方への回転運動によって 次第にアフリカ大陸から離れていった。中新世の終末を迎えて 紅海の陥没はその幅を広げ アフリカ大陸の紅海沿岸がほぼ固定されたが 南部のアデン付近からイエーメンの南端部付近まではまだ陸続きであり 大規模の火山活動が 紅海形成の原因となった構造線やアデン湾からアフリカへのびる構造線および前者とほぼ平行に走る構造線と密接に関係して 起こった。そのもっともはげしかった地域は 2大構造線が近接あるいは合致するエチピアと Hijaz 山脈および Asir 山

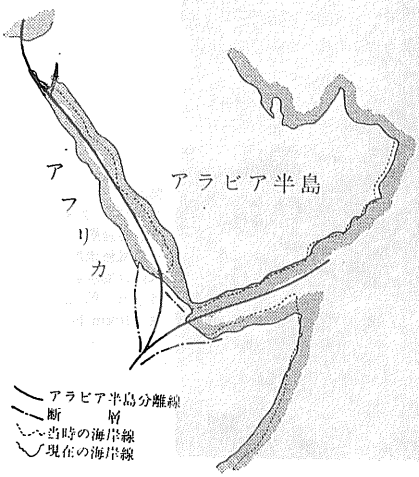
脈地域である(第29図)。そして この火山活動は第四紀へ継続された。イエーメンの首都 Sana の南方に露出する花崗岩や輝緑岩も 多分 この頃に侵入したのであろう。有名なアラビア馬も中新世にアジアから移動してきたらしい。

鮮新世の地層は 砂岩・泥岩・石灰岩等の海成堆積物の他 河成および湖成堆積物によって特徴づけられており 化石を多量に含む。鮮新世早期にはスエズ地域が永久的に上昇し 後期には東地中海地域が相対的に上昇した。鮮新世初期にまだ閉されていた紅海南部は その後も引続いてきたアラビア半島の運動によって 遂に開かれ Bab al Mandeb 海峡が形成され 紅海とインド洋との連結をみるに至った(第30図)。

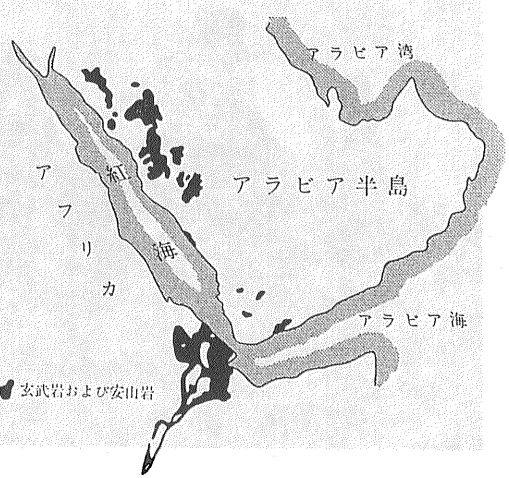
第四紀の堆積物は 海成・瀉成・河成・湖成・陸成の砂・シルト・泥・石灰質堆積物・塩分で飽和された堆積物(Sabakha deposits) 礫等よりなり 東部アラビアに広く分布する。これらの他 玄武岩や安山岩の活動がアラビア半島南西端部地域で行なわれており それらの火口は 完全な形を今もとどめ あるいは水をたたえて美しい噴石丘と共に 南アラビアの荒涼とした風景を救っている(第31図)。アラビアを語る場合 風成層を無視することはできない。ダーナ ネフュード ルブ・アル・ハリ砂漠を形造る砂の海 これらは アラビアということばから連想されるものの中で もっとも強烈な印象を私たちに与える。これまでアラビア半島の地質についておおまかに述べてきたが ルブ・アル・ハリ砂漠のたたずまいと 先人の足跡とを想起してこの項を閉じよう。

幻の都 Ubar

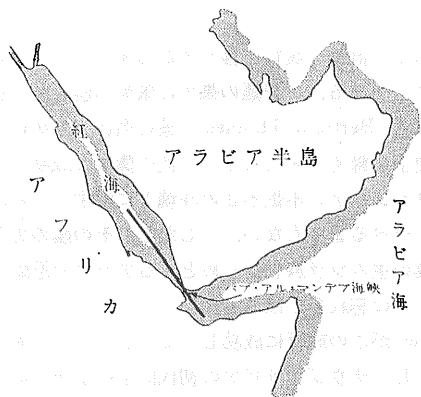
ルブ・アル・ハリ砂漠。 「虚無の世界」と名付けら



第29図 a
中部中新世末の古地理と
主要構造線 (DANIEL H.
SWARTZ, DANIEL D.
ARDEN JR. による)



第29図 b
新第三紀～第四紀の玄武岩
および安山岩の分布略図



第30図 アラビア半島をアフリカから完全に分離する原因となった鮮新世の構造線の位置 (DANIEL H. SWARTZ DANIEL D. ARDENJR による)

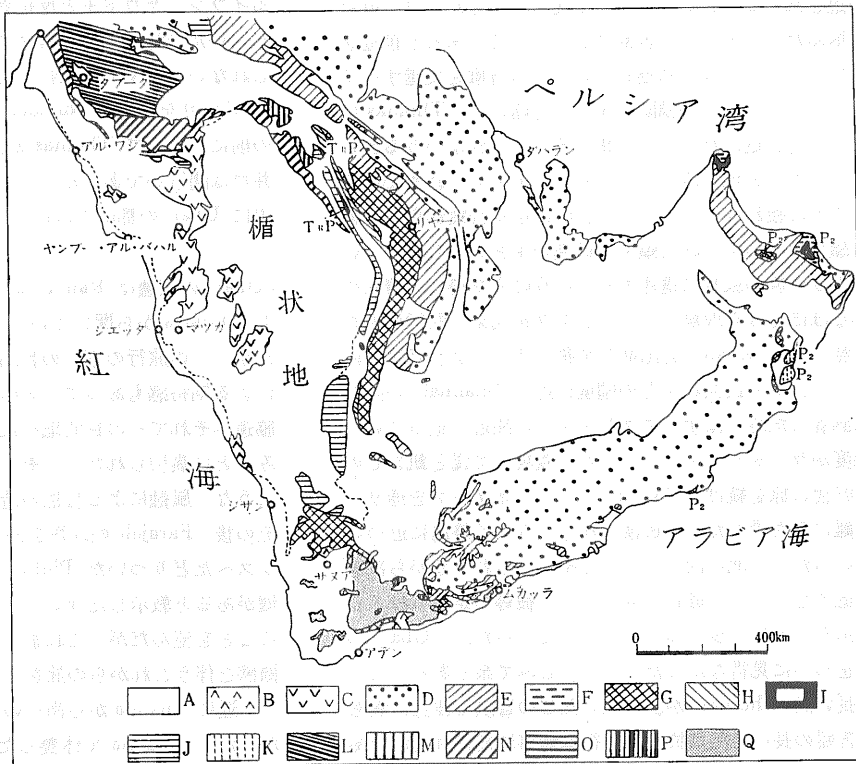
れたこの砂漠は ヨーロッパでは Empty Quarter という名で知られている。面積およそ65万km²といわれるこの砂漠の中に もし 日本全土を入れるとすれば なお28万km²の空地が残るほど この砂漠は大きい。もちろん その規模はサハラ砂漠にくらぶべくもないが 白熱の砂と砂丘だけが果てしなく続くという点では世界第一の砂漠であろう。現在は 主として石油資源探査を目的として 多くの外国人がこの砂漠の中で活動しているが 今からおよそ40年前までは この砂漠には 砂漠の主としてしられたムツラ族が居住し時折隊商が通る

今もなおアラビアの伝説の中に不動の名をとどむる大昔の都 Ubar それは すでに砂に埋もれて姿を消した ルブ・アル・ハリ砂漠の東部を横断する隊商路沿いの一部に栄えた都であった。今は遠く砂漠の中に消え去った この伝説の都を発掘し そのナズをみごとに解決することができるとしたら それは イエーメンの Marib の発掘に勝る アラビアにおける考古学上最大の成果として 惜しみなき世人の賞讃を受けるにふさわしい快心事であろう。

神秘に閉ざされ 多くのナズを秘めたこの大砂漠の門を最初に叩いたのはイギリス人 Bertram Thomas である。マスカットにイギリスの高官として滞在していた彼は この大砂漠に魅せられて 1920年代から 主としてアラビア湾岸やアラビア海沿岸を旅行した。数度の旅行で自信を得た Thomas が この大砂漠の横断を試みるべく Dhufar に到着したのは 荒れ狂った砂嵐もようやく沈まり きびしい冬の寒さを迎えようとする 1930年10月であった。フロンテアに燃え 未知の冒険旅行に胸を躍らせて出発準備を急ぐ Thomas の脳裏には Ubar の確認という偉大な成果を得て この旅行を無事に完了した時の栄光に輝く自己の姿が去来したことであろう。

しかし 長年この辺境の地に住み すべてを知りつけていたにちがいない彼の計画にも重大な誤算があった。道もない砂漠を旅する場合に不可欠のラクダがどうして

他には 外国人が立入ることはなかった。しかし 外国人の中には この砂漠の縦断あるいは横断を計画していたものがなかったわけではない。生きるにもそして旅するにも あまりにもきびしい自然条件が支配するこの大砂漠に なぜ 異国の民があえて冒険を試みようとしたのであろうか。彼等を アラビアということばのもつ神秘的なひびきの中に 生死を賭けたこの冒険にかりたてたものは 恐らく 今は地上にその姿をとどめない「ウバル (Ubar) の都」の発見と発掘という輝かしい希望であったらうと考えられる。



第31図 アラビア半島地質略図
 A:第四系 B:第四紀火山岩類(安山岩) C:新第三紀火山岩類(玄武岩および安山岩) D:第三系
 E:白亜系 F:ジュラ系および白亜系 G:ジュラ系 H:三畳系 I:二疊系および三畳系
 J:二疊系 K:末群古生層 L:デボン系 M:オールドビス系 シルリア系およびデボン系
 N:カンブリア系およびオールドビス系 O:カンブリア系 P:先カンブリア系-古生層
 Q:先カンブリア系(楯状地については模様を割愛)

も手に入らなかったのである。来る日も来る日もラクダと共に生きる遊牧民の到来を待つ彼を あせりと絶望感がおそった。そして遂に Thomas はこの計画を断念して任地のマスカットへ帰ることを決心した。しかし異常なまでの征服感に燃える彼を天は見捨てなかった。マスカットへ向って船出しようとする直前に遊牧民の集団が到着したのである。驚喜した彼は運よくラクダを手中にし 最少限度の食糧を携えて テントも持たず 計画の完遂を旨としてルブ・アル・ハリへと旅立って行った。この時すでに ルブ・アル・ハリは冬を迎えていた。Salalah を出発し ハドラマウト山脈の東部山麓に広がる草原地帯を過ぎる頃から はやる心とはうらはらに 彼等の足どりは次第に重くなっていった。ラクダの飼料を確保するための時間的ロスもさることながら サウジアラビア建国以前のこの時点では この乾き切った大地の到る所に盗賊が出没し 旅行者は 絶えず その襲撃による略奪と死の危険にさらされていたからである。

しかし彼等は 幸にして そうした危機に直面することもなく 12月に入って間もなく Mitam の谷にたどりついた。この谷に近い砂原にはラクダの足跡がはつきりと残されていた。幻の都 Ubar への道。Ubar への道をたどるべきか このまま北進すべきか Thomas は悩んだ。そして 苦難に満ちているであろう前途を思い 予期した以上に遅れているこの計画を促進すべく ルブ・アル・ハリを横断にすべてを賭けて Thomas は北への道を選んだ。いつ果てるともしれないうろたいないこの大地の旅 ラクダもそして人もこれまでの旅ですでに疲れきっていた。苦渋にゆがむ疲れ果てた彼の顔。そのやつれた頬も 砂漠の主としていられていたムッラ族の族長に遭遇するという好運を得て 晴れやかなほほえみを取戻した。ラクダを代え 同行の人を交替して Mitam を出発した後 サウジアラビアと南イエメン人民共和国との国境に近い Shannah の井戸に到着した時にはすでにクリスマスが間近に迫っていた。幾度かラクダを代え 乏しい水と食糧とで渴と飢をしのぐ野宿の旅を続けながら Farajah のオアシスを通り 苦難に満ち満ちたこの砂漠の旅もようやく終局に近づいていった。北へ向って ゆるやかにうねりながら次第に低くなってゆく砂丘と砂の海原 彼等の足どりは 目を追うごとに 少しづつ早くなっていった。Ubar の都をついに見得なかったことは惜しみて余りあるにしても長い間 Thomas が夢に画いたこの冒険と波乱に満ちた苦難の長い旅路は終り 一行は無事に最終目的地である Qatar 半島の一角 Doha にたどりついた(第32図)。

1931年の冬 計画を実行に移してからすでに一年を過ぎた日のことである。苦難の果てに栄光の座を勝ち得たイギリス人 Bertram Thomas 彼の名は 永久に アラビア史上に輝くことだろう。彼の偉大な成功が 彼自身のフロンテアと不倒不屈の斗魂とに帰することは今更ここに述べるまでもない。しかし その蔭の力となった砂漠の主ムッラ族をはじめとするアラブの忍耐と献身的努力とは忘れられてはならない。

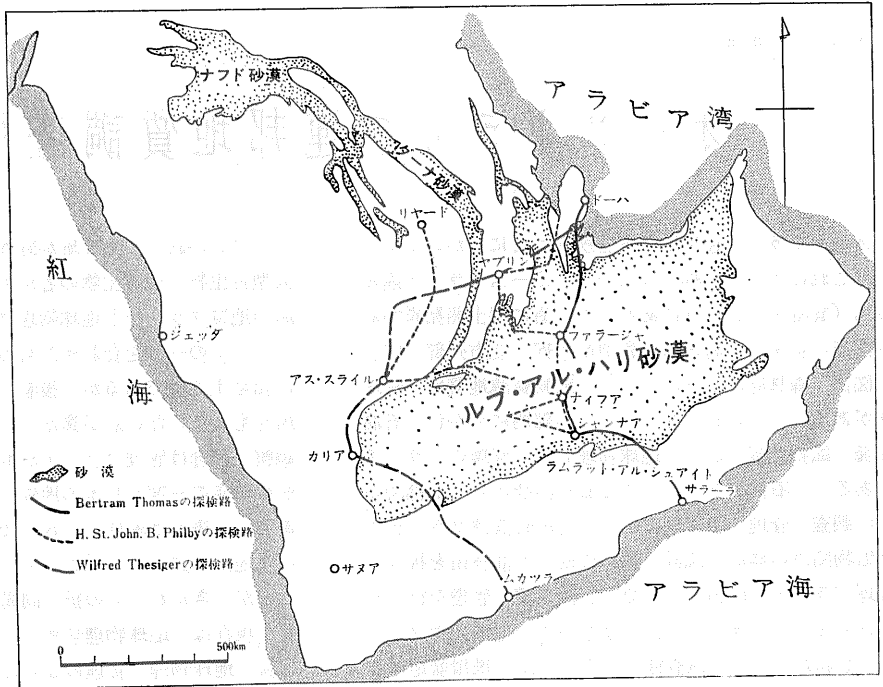
Thomas がこの旅行に成功した後およそ11ヵ月過ぎた 1932年1月 サウジアラビアの初代国王の顧問であったイギリス人 H. St. John B. Philby が Ubar とルブ・アル・ハリ砂漠の探検を志して Thomas の旅行の終着地となった Qatar を出発した。この時までおよそ14年間にわたってこの計画を練っていた Philby は 出発前に Thomas に会ってその経験と旅行の実情を聞き Thomas とは逆の方向へ旅立った。Qatar を出発した Philby は まず この砂漠の北端部近くを横断して数千年前まではアラビア湾が入りこんでいたといわれる Yabrin の町を旨とした。ここで数日間休養した後 一行は ルブ・アル・ハリを中心部へ向って南下したが Yabrin を出発してから53日の間人影を見ず 寂寥感が常に彼を悩ませた。現在ではこのように長い間人間に逢わないということもないだろうが 建国の意気に燃ゆるイブン・サウド王と反抗者との戦が随所に繰り広げられていた当時としては当然すぎるほど当然であったかもしれない。すでに住む人もなく 朽ち果てた Maqainama の町をすぎ Numaila の井戸を経て東へ進む一行の前に かつて Thomas が足跡をしるした Farajah の井戸は間近かであった。そうした時 同行の遊牧民の中に Ubar の都はこの近くにあったと話すがいた。

「Ubar の廢墟は Ramlat al Shuayt にあるに違いない」と Thomas から聞いていた Philby は 一応これを疑ったが この旅行の第一の目的が Ubar の確認であることによる期待感もあって その男の言葉に従うことにした。脇道へそれてその目的地へたどりつきはしたが 期待はみごとに裏切られた。そこには まるで人工の建物のような 風蝕による自然の造詣しかなかったのである。その後 Farajah の井戸を過ぎ そして Shanna のオアシスへたどりついた Philby は Thomas が Ubar の廢墟があると教示した Ramlat al Shuayt へ向って南下することを望んだが これまでの長旅による疲労と常に危機感を伴うこれからの旅を憂う遊牧民達の反抗に勝てず 遂に Shanna から南への旅を断念しなければならなかった。Shanna で休養した Philby は その後 遊牧民すらあえて立入ろうとしない西部ルブ・アル・ハリへ

の旅行を試みて出発したが やがてラクダの疲労と同行した原地人の反抗とによって予定を変更せざるを得なくなり 止むなく途中から東へ道をとって Nayfah へ向った。Nayfah の井戸水は 塩分が多く 決して清浄ではなかったが 彼等にとっては至上のものであったらう。

Nayfah で疲れを癒やした一行は 直接 Riya-dh へ向う者と 砂漠を横断して As Sulayyil へ向う Philby を中心とする者との二手に別れて出発した。そして Philby 一向は 未知であった西部ルブ・アル・ハリ砂漠を踏破して As Sulayyil に到着して休息した後 Dahna砂漠南端の砂丘を越えて 遂に Riyadh へたどりついたわけである。Philby にとっても 栄光への道は 余りにもけわしくそして長かった。Philby は偉大な探検家として名声を得 その著書「Empty Quarter」は多大な感銘を世人に与えはしたが Ubar の秘密をあばくという彼の最高の目的は遂に達せられなかった。

1947年 アラビア海のエメラルドに映える美しい火口を後にして 西部ルブ・アル・ハリ砂漠横断のために 港町 Mukalla を出発した人々の姿があった。この砂漠の先駆者である Bertram Thomas H. St. John B. Philby と同じイギリス人 Wilfred Thesiger と同行の人々である。第一次世界大戦前からアフリカ大陸の探検に時をすごしていた Thesiger は 私たちにはとてもまねのできそうにない軽装と粗食で 異常な速さでこの探検旅行を進めていった。ハドラマウト山脈を越えルブ・アル・ハリを踏破して Qariya に到着したのは1948年1月18日 そして彼等はここで野営をしたのであるが 探検家として すでに ある程度名声を得ていた彼は とても考えられそうにない大きなミスをここで犯したのである。Thesiger がこの探検旅行に着手するおおよそ3年前の1944年 アラビア湾岸に本拠地をおく Arabian American Oil Company (ARAMCO) の石油資源調査隊が この Qariya で 古い碑文を発見した。



第 32 図 ルブ・アル・ハリ砂漠探検路

その碑文は 紀元前およそ2世紀 カナンの地に権勢を誇ったユダヤ王国第2代の統治者ソロモン王に貢物を届けるべくみずからエルサレムにおもむいた女王の国 シーバ王国の文字で刻まれていた。この遺跡は 発見直後に Philby によってかなり詳細に調査されたが The siger はそれ以上に深くは探らなかったのである。

Thesiger は Qariya を出発して北東へ向かい Thomas と Philby が足跡を残した Yabrin を経て Qatar へ到達した。1948年のことである。

ルブ・アル・ハリ砂漠の門を開いた先駆者 Bertram Thomas がこの大砂漠の横断をはじめて志してからおよそ18年後 神秘と恐怖に閉ざされたこの大砂漠は ようやく その素顔を見せたわけであるが ARAMCO の調査隊およびアメリカの探検家 Wendell Philips のその後の精力的な活躍をもってしても 遂に 幻の都 Ubar のナブは 依然として 灼熱の砂に埋もれ 明るみに出されることが出来なかった。砂に埋もれた遺跡はこの砂漠地帯で幾つか発見されてはいるが それらは Ubar であることを示す何物も残してはいない。Ubas は 真に 唯一の都であろうか。アラブの伝説は「Ubas は 広大な城郭の中に大理石で造られ 教知れぬ財宝の山とルビーをちりばめた銀の岩をもつ都であった」と語る。

(筆者は鉦床部)